

バードリサーチ ニュース

2011年6月号 Vol.8 No.6

Zosterops japonicus
Photo by Mikamo Hiroki

活動報告

みにクル狭山公園調査 その1 増やせ！みにクル狭山ネットワーク 守屋年史

狭山公園は、埼玉県と東京都にまたがる狭山丘陵のほぼ東端に位置していて、多摩湖に隣接しています。園内は起伏の多い地形に雑木林や笹藪があり、広場や池もある緑の多い公園です。その公園で、2009年6月から毎月第1土曜日を基準日として「みにクル狭山公園調査」を始めました。従来のラインセンサス法（常時歩きながら鳥を記録していく）と違って、移動しては10分間の定点調査を行い記録していくスポットセンサスという方法を使って調査を行っています。調査初心者の方に野鳥の調査の様子を体験してもらうことと、あまり馴染みのない調査方法を試してもらうことが目的となっていますが、最終的には参加した方が自宅の周りで独自に調査を主催できればいいなあと考えています。というわけで得られた調査結果は副次的なものです。2年間の成果を数回に分けて報告したいと思います。

季節変化と主な種に注目

調査は、公園内に6か所のモニタリングポイントを選び調査を継続しています。現在、2009年6月から2011年6月までの2年間の調査で、27科50種が公園内で確認され、調査時間外や多摩湖でも確認された種を合わせると、33科76種が周辺で観察されています。季節変化をみると、夏期に種数・個体数とも少なくなり、冬期に増える傾向があり



図. 狭山公園調査において記録された鳥の種数と個体数。(調査ポイントから半径50m以内で確認された鳥)

(図)、越冬地として利用する鳥が多いことを示しています。また、10、11月頃の晩秋に個体数が最も多くなります。これは、ヒヨドリやカワラヒワが群れで観察されることが多いため、集団で移動している個体だと考えられます。

最も頻度高く観察されている種はハシトガラスで150回(25か月×6地点)と毎月どの地点でも記録されました。以下、ヒヨドリ(139回)、シジュウカラ(123回)、メジロ(121回)、ウグイス(107回)、ガビチョウ(106回)などが常連となっています。個体数でもハシトガラスとヒヨドリは1位と2位でした。林のある環境に一般的に生息する種に加えて、ウグイスやガビチョウなどの藪が好きな鳥も多く観察されました。複数の異なる環境で同じ調査ができれば、一般的に言われている種ごとの環境選択の違いをデータで示すことができます。ぜひ、一度みにクル狭山公園に参加していただき、同じ方法で調査してくれる場所を増やしてください。【守屋年史】

■「みにクル」調査の予定や結果こちら。

http://www.bird-research.jp/1_minikuru/

図書紹介

Observing Animal Behaviour – design and analysis of quantitative data –

Marian S. Dawkins 著 / Oxford University Press ペーパーバック 約5000円 ハードカバー 約12000円

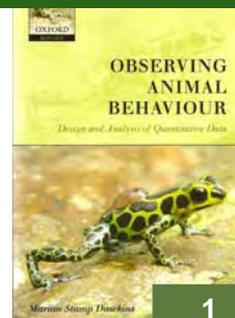
鳥や動物を観察して調査してみたいと思っても、何をどのように記録検討すればよいかわからないことがあります。観察による研究手法や概念をまとめた行動学畑のドーキンズさんの本はそんな疑問を一気に解決してくれます。

まずは、何を知りたいのか正確な問いをする、検証ができるような仮説をたて、結果を予測しておくこと。何回観察を重ねれば満足な研究になるかという手引きや、どんな時にどの統計手法を使えば良いか等々、具体例を交えて、解説してくれます。紙とペンでできる観察記録から、

ロガーを使った近代的な研究まで、技術を問わず研究についての心構えを示してくれます。学生はもとより、日ごろ鳥を観察しているアマチュアにとっても心強いマニュアルになるでしょう。

英語なので、出版社さえついたら、和訳してみたい本です。

【黒沢令子】



活動報告

研究集会 in 山中湖 開催報告

5月21～22日に山中湖畔で研究集会を開催しました。今回は合宿形式の泊りがけで実施しました。場所も東京や大阪などと比べると、全国から集まるには不便なところでしたが、満員御礼、定員いっぱいまでご参加いただき、スタッフと講師合わせて37名で実施することができました。北は北海道、南は長崎からお越しいただきました。関東圏以外からの参加者も多く、うれしかったです。今回は、講義をライブ配信するという試みも行ないました。その映像は、少し加工してネット上にUPしています。講演内容はそちらを見ていただくとして、それだけでは伝わらない部分をご報告したいと思います。

● 講演とパソコン実習

初日は午後から、山中湖情報創造館で講演やパソコンを使った実習をしました。まず最初に、東京大学の天野達也さんに基調講演をお願いしました。天野さんは最近、モニタリング関係の論文を精力的に発表されていて、鳥学会や生態学会からもその研究が表彰されています。「どのように鳥類をモニタリングするのか？」と題して、日本のシギ・チドリ類の個体数の経年変化の話のほか、ヨーロッパの事例を盛り込んで、なぜモニタリングが必要なのか、どのようにモニタリングしていくのが良いか、わかりやすく解説していただきました。その後、参加者からの研究発表は、アカハラダカの個体数とエルニーニョとの関係を示した馬田勝義さんの発表や、海岸に水を飲みに行くアオバトの行動や食性の謎についてこまたんの大坂英樹さんの発表など、全部で6題。どれも興味深い内容でした。

後半は、TRIMというソフトを利用した個体数変化の解析の実習を立教大学の笠原里恵さんを講師にお招きして実施しました。参加者にノートパソコンを持ってきてもらっての実習です。例えば毎月5か所で調査しているけれど、たまに4か所しか調査できなかった・・・というデータを持っていると解析するときに困ってしまいます。しかし、TRIMさえ使えば、そんなデータでも簡単に個体数が増えているのか、減っているのか、一発でその傾向をはき出してくれます。たくさんデータは持っているけど、どうまとめようか悩んでいた方には心強いソフトです。

この日の様子は、インターネット上の動画配信サイト「USTREAM」を使って生中継しました。初めての試みでしたが、40人ほどが視聴してくれていたようで、質問や感想の書き込みがありました。会場でスタッフが質問を代読し、演者に答えてもらいましたが、遠く離れた人同士がつながるというのは、嬉しいものですね。



図. USTREAMの生中継画面。右の欄に質問や意見を書き込める。



写真1. パソコンを使った実習前の解説中。

● やっぱり畳で車座がいい

パソコン実習が終わった後は、泊まりがけの研修の醍醐味、懇親会です。宿泊は山中湖情報創造館と2日目に野外実習を行なう東大の富士演習林の間にあるホテルにしました。翌朝は早朝から実習の予定でしたので、懇親会は早めに切り上げ、スタッフの部屋で2次会をしました。全員参加することはないだろうと思っていたのですが、かなりの参加率で、足の踏み場もない状況に。まだ空調が夏用に切り替えられていなかったため、エアコンが使えず、人の熱気で室内はすごいことに。それでも、あちこちに車座の輪ができて、汗を拭きながら22時まで盛り上がりました。



写真2. 2次会の様子。

● 森林性鳥類の環境選好性調査実習

研究集会の2日目は、有志で夜明け前から林に入って、夜明け時の大合唱を聞きに行こう、という企画を組んだのですが、昨日遅くまで呑み交わしていたにもかかわらず27名も集まり、びっくりしました。その後は、モニタリングデータから鳥の環境選好性を解析してみようということで、森林性鳥類のセンサス方法の実習とそのデータ解析を行ないました。解析は、朝みんなで調査して採ったデータを使い、「R」という無料の統計解析ソフトで、各班それぞれで、いろんな解析を試してみる、ということをやろうとしたのですが・・・、同じ環境でもパソコンによってうまく動かなかったりと悪戦苦闘。それでも、環境による鳥類相の違いを明らかにすることができました。詳細は・・・、参加者一同からの報告ということで、次の記事に譲ります。

今回の研究集会はいろいろ新しいことにチャレンジしました。うまく行ったこともあれば、失敗したこともありましたが、いかがでしたでしょうか？僕は楽しかったです。今回の研究集会の経験をもとに、同じような形式の鳥学講座を続けていきたいと思っています。今度は西日本で開催したいと思っています。お住まいの近くで企画した時は、是非ご参加ください。一緒に楽しく勉強しましょう。

【高木憲太郎】

■2011研究集会<モニタリング調査解析編>報告ページ
http://www.bird-research.jp/1_event/shukai11/11taikai.html
 (録画した動画の視聴や、要旨のダウンロードができます。)



写真3. 夜明け直後の探聴会。姿はあまり見えないけれど、耳を澄ましてさえずりに聞き入りました。



写真4. 野外実習後、班ごとにわかれて分析にチャレンジ。

レポート

樹種より低木の有無が鳥に影響？ ～山中湖での研究集会実習の解析から～ 研究集会参加者一同・植田陸之

研究集会の2日目、5月22日の実習は山中湖畔の東京大学の富士演習林で行ないました。標高は約1000mで、カラマツの混じる天然林に近い植生や針葉樹の見本林がパッチ状に作られています。5班に分かれて、各班4～5地点の調査定点で周囲25m以内とそれ以外に分けて10分間、記録できた鳥の種と数を記録しました。環境間の比較ができるように、針葉樹林、混交林、低木層の有無といった相観植生に注目して、それぞれの班がいろいろな植生の場所でデータをとるようにしました。ひと班だけ、25mではなく50mで記録してしまった班がありました。それをいれて解析しても外して解析しても結果に大きな違いは無いようでしたので、せっかくとっていただいたデータですので、今回の解析ではそのデータも合わせて解析しています。



写真 第1班のメンバー。

樹林の階層構造が鳥の種数を多くする

解析実習では、針葉樹林低木あり、針葉樹林低木なし、混交林低木あり、混交林低木なしに分けて、種数や個体数など比較してみました。事前の予想では針葉樹林で種数や個体数が少なく、種別に見ればキクイタダキなど針葉樹林に多い種もいるといった結果になるのかと思っていたのですが、確かにキクイタダキは針葉樹

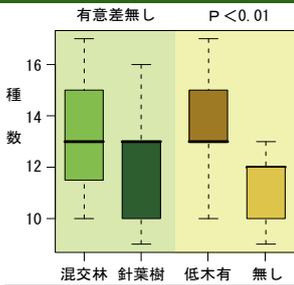


図1. 記録された種数の環境間での比較。樹種構成と低木の有無を別々に検定した。

林に多かったものの、全体的な鳥の多さは、樹種による区分はあまり効いていませんでした。混交林といってもメインの樹種はカラマツなどの針葉樹だったことが、樹種による差が出なかった原因なのかもしれません。そしてこの調査地での鳥の多さに効いているのは低木層の有無といった階層構造の方だという結果でした(図1)。

階層構造による鳥種の違い

種別に見てみると、有意な違いこそないものの、低木層のある林ではウグイス、センダイムシクイ、メジロが多く、逆にアカハラ、カケスは少ないことがわかりました(図2)。前者は藪で採食したり営巣したりする種で、後者は地上で採食する鳥です。低木がなくなると、前者の鳥たちは採食、営巣資源がなくなり生息することができず、逆に後者の鳥たちにとっては良い採食環境が提供されるのだと考えられます。そして富士演習林には前者のタイプの鳥たちの方が個体数が多いために、低木層のある林の方が種数、個体数ともに多くなったのかもしれない。



図2. 低木のあるところで多そうな鳥とないところで多そうな鳥。

シカが増加して食害が問題になっている奈良県大台ヶ原では、シカの食害により藪がなくなり、ウグイス、センダイムシクイが減少し、アカハラが増加したと考えられています。今回の低木の有無はシカではなく、人の管理によるものですが、奇しくもここ富士演習林でも近年シカが増え始めているそうです。富士演習林は環境省のモニタリングサイト1000の調査地に登録されており、5年に1度のモニタリングを今年からはじめました。今後シカの増加により、鳥にどのような影響がでてくるのかを、今回得られた結果を念頭に置きながら、モニタリングしていきたいと思っています。

研究誌 Bird Research より

● 今月の新着論文

3本の論文が受理になりました。ヤマガラとミゾゴイ属の論文は、偶然ですが両方とも鳥の鳥の論文です。ヤマガラの論文は伊豆七島における各亜種の生息数についての論文、ミゾゴイ属鳥類の宮古島での営巣記録はおそらくズグロミゾゴイと思われる鳥の営巣記録です。今、環境省でレッドリストの改定の議論がなされていますが、これらの鳥たち

藤田薫ほか. 伊豆諸島に生息するヤマガラ3亜種の個体数と生息の安定性. Bird Research 7: A13-A30

三上かつら・植田陸之. 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. Bird Research 7: A31-A42

小海途銀次郎・水田拓. 宮古島におけるミゾゴイ属鳥類の初営巣記録. Bird Research 7: S5-S8

は、いずれもレッドリストの対象種です。こういった記録の公表は、レッドリストの評価/見直しに役立つ社会的に有用なものです。これまで知られていなかった島での繁殖記録や繁殖行動の観察などお持ちの方はぜひ投稿ください。



写真. ズグロミゾゴイと思われる鳥の巣。

リュウキュウサンショウクイの論文は島出身の鳥ということでは上記2種と似ているのですが、これは近年分布を拡げています。この論文での分布の最先端の記録は奈良県と香川県ですが、先日、大阪でも記録されたとのこと。今後も分布が広がる可能性があるため、注目し続けていきたいと思っています。

【植田陸之】

ホンセイインコ 英: Ring-necked Parakeet 学: *Psittacula krameri*

1. 分類と形態

分類: インコ目 インコ科

日本では、亜種ワカケホンセイインコ *P. k. manillensis* が野生化している。ここでは、東京を中心とした個体群について記載する。

全長: 370-430mm
 自然翼長: ♂ 168.5± 4.6mm (N=7) ♀ 166.1± 3.9mm (N=11)
 露出嘴峰長: ♂ 24.3± 0.8mm (N=7) ♀ 23.7± 1.4mm (N=11)
 尾長: ♂ 241.9± 20.8mm (N=7) ♀ 222.9± 14.9mm (N=10)
 ふ蹠長: ♂ 18.6± 1.2mm (N=7) ♀ 18.8± 1.3mm (N=11)
 体重: ♂ 145.6± 11.6g (N=7) ♀ 145.5± 9.4g (N=12)
 ※ 成鳥と特定できた個体の計測値。全長はdel Hoyo (1997) による。

羽色:

全身が黄緑色で、中央尾羽は水色がかかる。嘴は赤色。オスは頸に黒色とピンク色の輪がありのども黒い。通常この特徴はオスだけであるため雌雄の識別点となるが、幼鳥は頸の輪が見られないため、頸の輪が無いから雌であるという識別はできない。幼鳥は飛べる状態で巣から離れるため、巣立った時点で既に成鳥との区別が難しい。幼鳥は尾羽が成鳥より短いものの、成鳥でも換羽で尾羽が抜けているものがあるので、注意が必要である。



写真1. 亜種ワカケホンセイインコの成鳥オス(左)と成鳥メス。

鳴き声:

キュアキュアなどよく通る大きな声で鳴く。生息地でも、飛んでいるときでもよく鳴くため、姿よりも声で生息を知ることが多い。雌が雄に餌をねだるときはキュウ、キュウと甘えた声を出す。

2. 分布と生息環境

分布:

この亜種は、本来インド南部やスリランカに生息しているが、ペットとして世界各地に持ち込まれ、ヨーロッパやアジア、アフリカ、北アメリカ、ハワイ諸島など、様々な地域で野生化が確認されている。日本では、1969年に東京で記録されてから、亜種ワカケホンセイインコが各地で観察されるようになった。1980年代には大阪や名古屋など、各地で見られたようである。しかし、現在群れとして生息が確認されているのは、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、群馬県のみである。そのうち、東京都、神奈川県、埼玉県は同じ個体群と考えられる。東京都を中心とした個体群は、大田区にある東京工業大学のイチョウ並木で集団ねぐらをとっており、一時は1,200から1,500羽ほどが利用していた。しかし、ねぐらの隣接地で校舎の増築が行われ、ねぐらの木も剪定されるなどの影響があった



写真2. 太田区にある東京工業大学の集団ねぐら。

ため、長年使ってきたねぐらは現在使われておらず、近くの別のイチョウに移動している。そのため、ねぐらを利用している個体数は不安定で、2010年の秋から冬にかけては800~900羽程度であった。

生息環境:

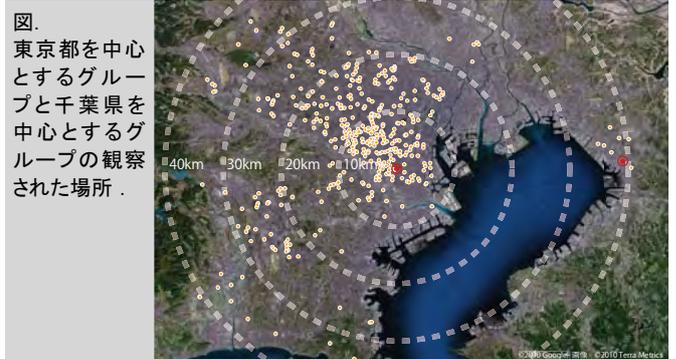
公園や社寺林、屋敷林などの点在する緑地に生息し、緑地間を往来する。基本的には森林と呼ばれるような奥深い緑地を好まない。公園等の緑地でも主に林の縁を使う傾向がある。東京都を中心とする個体群は、冬場は餌台に飛来することが多いため、人家の庭にも降りてくるが、基本的には高い場所を好み、あまり下に降りてくることはない。水も、樹上木のまたなどに溜まったものを利用している。しかし、海外では地面でも採餌しているようで、群馬県や千葉県でも、畑等への飛来が観察されている。

3. 生活史



繁殖システム:

一夫一妻であるが、繁殖地には営巣個体とは別に非営巣個体のとりまきが多く生息し、巣の穴を覗いたり、時には中に入り込むこともある。ヘルパーの役割は無いと思われるが、カラスなどの外敵が近づいた際には、一緒に防衛をする。営巣をしていない時期は、準備期も含め、雌雄共に営巣地とねぐら間を毎日通勤するが、抱卵が始まると、メスは巣穴に残るようになり、オスだけ通うようになる。この生態は、テレメトリー調査によって証明された。営巣中のオスに発信器を着けて追跡を試みたところ、東京都のねぐらに毎日戻っているのが確認されたのである。追跡したのは、神奈川県の大和市と相模原市で営巣していたオス2羽であるが、営巣地は、どちらもねぐらから26km程離れていた。営巣中のエネルギー消費が激しい時期でも、雨風にも負けず通い続けているのには驚かされる。しかし、稀な例ではあるが、大和市の巣箱で繁殖している個体の中に、営巣期に入るとねぐらに帰らず、夜も巣に残っていたオスが確認されている。巣箱の中は広かったため(写真3)、オスが泊まれるスペースがあったことが理由かもしれない。なお、多くの営巣地では、ヒナが大きくなり、巣穴の中のスペースが無くなる頃には、メスもねぐらに戻るようになる。



巣:

営巣環境はムクドリと似ており、樹洞やキツツキの穴、建造物に空いた穴のほか、巣箱も利用する。穴は大きなもの

を使うこともあるが、基本的には自分がギリギリ入れるぐらいの穴を好む。本種は穴の入り口等を嘴で削る習性があるため、巣箱のような板であれば、自分で穴を広げて適度な大きさにしてから利用する。大和市の巣箱では体をよじりながらでないとう入りできない穴もあった。穴は水平方向に空いている穴だけでなく、他の種があまり使わない、上に空いた穴も利用する。水平方向に空いた樹洞があっても、あえて上に空いた穴を利用する場合が多々あるため、そのような穴を好んで使用しているのかもしれない。巣穴までの高さは様々であるが、低いところでは4.5m、高いところでは34mという高さでも営巣する。

卵:

一腹卵数は3~5卵で、平均30.00×23.65mm (Michael Braunによる計測値)の白色の卵を産む。卵数は営巣する巣穴の空間の広さに関係していると思われる。

抱卵・育雛期間, 巣立ち率:

3月から4月にかけて産卵し、抱卵期間は約3週間、4月から5月にかけて孵化する。巣内育雛期は約7週間で、5月下旬から6月にかけて巣立つ。東京を中心とする個体群では、巣立ったあとは直ぐに営巣地を離れ、巣立ちヒナを何日かかけて大田区のねぐらまで移動させる。その頃のねぐらでは、寝る場所を確保できないのか、木の下のほうでウロウロして騒いでいるたくさんの若い個体を見かけることがある。その後は営巣地には戻らず巣外育雛期を過ごすことになるが、テレメリー調査では、ねぐらから26km離れた営巣地で巣立ったヒナが、ねぐらに移動した後は、ねぐらから10km圏内で親鳥と過ごし、ねぐらと行き来していたのが確認されている。巣外育雛期を終えると、10月から11月には親鳥は営巣地に通勤するようになり営巣する穴に執着を始めるが、巣立ったヒナは戻って来ないため、分散するものと思われる。



写真3. 巣内ヒナ。

4. 食性と採食行動

食物は植物質で、主に木の芽や実を食べる。これまでの記録では、イチヨウやプラタナス、ハルニレなどの新芽、サルスベリ、サクラ、クワ、ビワ、ヤマモモ、ヒマワリ、スギ、ナツツバキ、ケヤキ、ムクノキ、カキ、シラカシ、アキニレ、ハゼ、カラスザンショウなどの実、ニセアカシアやユリノキなどの花、梅の花芽などを食べているのが観察されている。また、サクラが咲く頃にはサクラに集中して飛来し、花を落として食べる姿を見かける。花柄を食べているようには見えないので、スズメと同じで蜜を舐めているのではないかと思われるが、スズメと比べると一つの花をちぎって捨てるまでの時間がすこぶる速く、とても味わっているようには見えない。この他、松葉菊の花や葉を食べているという報告が複数ある。葉が肉厚のため、好まれるのかもしれない。冬場は餌台に飛来し、ヒマワリの種やリンゴなどを好んで食べる。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 在来種との競合と農業被害

本種は外来種であるため、問題となるのは在来種との競合と農業被害である。在来種との競合で問題視されるのは営巣環境であろう。本種は樹洞営巣であるため、アオバズク、アオゲラ、シジュウカラ、スズメ、ムクドリなどの多くの種と競合してしまう。その中でも最も競合しているのがムクドリである。ワカケホンセイインコは、樹洞や巣箱だけでなく、ムクドリが営巣するような建築物の穴や隙間でも営巣するため、営巣場所はムクドリと争うことになる場合が多い。体の大きさからワカケホンセイインコが圧倒するイメージがあるかもしれないが、実際は五分五分といった感じである。体の大きさにもものを言わせて樹洞の居住権を主張するワカケホンセイインコと、隙をつきながらひたすら巣材を運び込むムクドリとの間で攻防戦が行われるが、どちらかが必ず勝つと決まっているわけではない。遠いねぐらから通っているワカケホンセイインコのほうが、夜明けから巣材を運び込めるムクドリよりも不利な場合もある。農業被害については、今のところ大きな問題になっていない。生息地では、果樹園は防鳥ネットで隙間無く囲まれている場所が多いため、ワカケホンセイインコも中に入れられない場所が多いが、都内ではプルーン畑でプルーンの実を食べあさっているのが確認されている。この場合は畑の管理者が近くに住んでいないために本種の仕業と思われていないようであった。この他、リンゴやヒマワリの実が食べられたという被害報告はあるものの、ほとんどが個人の庭であり、農業被害というレベルにはなっていない。しかし、千葉県では1980年代に落花生の畑へ大量に飛来し被害を出していたという情報もあるので、今後も注意が必要である。

6. 引用・参考文献

- del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. eds. 1997. Handbook of the Birds of the World. Vol.4. Sandgrouse to Cuckoos. Lynx Edicions, Barcelona.
日野圭一 1990. 都市に見るふるさとの熱帯. アニマ, 208:20-24, 平凡社.
Lever, C., 2005. Naturalised Birds of the World. T & A D Poyser, London.
中田玲子 2008. 外来種ワカケホンセイインコの繁殖に関する研究. 東京農工大学卒業論文.

執筆者

藤井 幹

財団法人日本鳥類保護連盟 調査室



日本に本来生息しないインコ目。目レベルで異なる外来種がどのように生息しているのかとても興味がわき調べ始めましたが、愛着がわいてしまって擁護側にまわってしまいそうな今日この頃です。まだまだ分からないことだらけの鳥ですが、皆さんからの観察情報をお待ちしています！

活動報告

鳥学講座アンケート 結果その1 ~ご協力ありがとうございました~ 高木憲太郎

バードリサーチ鳥学講座についてのアンケートへのご協力、ありがとうございました。企画を検討する上でとても参考になる情報が集まりましたので、数回にわけてご報告したいと思います。第1回目の今回は、回答率と講座のテーマについて、会員総数1268名中255名の方からご回答いただきました。回答率は20.1%でした。回答率上位の5県には会員数が少ない島根県や沖縄県などが占めました(図1)。会員数が多い都道府県の中では、千葉県が6位と高い位置に入っていました。

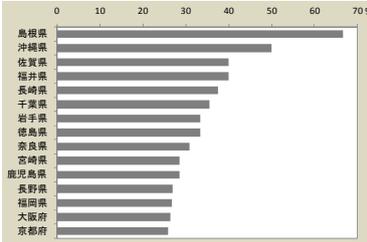


図1. 都道府県ごとの回答率Top15. 西日本の府県が多く並ぶ.

一番人気だったのは、生態学講座、2番目が調査方法や機器についての講座で、3番目はデータのまとめかた講座でした。意外と識別講座が上の方に入っていました。

生態学講座については、どんな内容に興味があるか、さらに聞いてみました。すると、他のテーマをおさえてトップに躍り出たのは「渡り」でした

が、繁殖生態や適応戦略、社会行動など繁殖と深く関わるテーマがそれに続きました。渡りについては、2008年に札幌で開催した研究集会で取り上げているので、鳥学講座の第一段は繁殖生態をテーマにしてみようと思います。

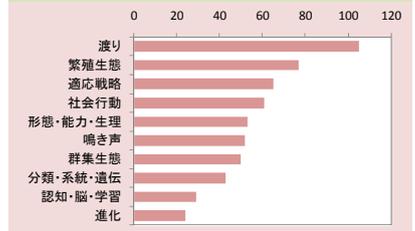
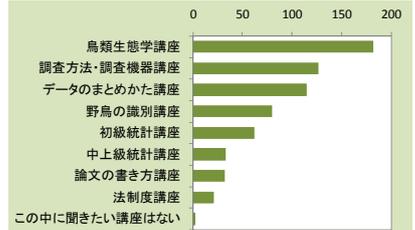


図2. どんな講座なら聞いてみたいか、ひとり3つまで選んでもらいました.

レポート

ムナグロとダイゼン

守屋年史

ムナグロとダイゼンは、同じチドリ科の仲間で見目が良く似ていますが、ムナグロは内陸のやや乾燥した農耕地を、ダイゼンは干潟をよく利用しており生息する環境が異なることが知られています。昨年のモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査(<http://p.tl/hs6x>)の結果から渡り期の傾向をみると、100羽以上のムナグロの群れは、東北や関東の水田地帯、沖縄の湿地帯で観察されています



図. 2010年春期と秋期にムナグロ(橙色)とダイゼン(灰色)の100羽以上の群れが確認された調査地点。モニタリングサイト1000データ(環境省自然環境局)を基に作図。

(図)。それに対して100羽以上のダイゼンの群れは、東京湾・三河湾、吉野川河口、周防灘、有明海・八代海などの関東から九州北部の干潟で観察される傾向があり、生息環境の違いに加えて、利用が集中する地域も大きく分かれています。本州では、干満差が大きく干潟が形成されやすい地域と大きな河川の堆積平野が広がる地域の分布が異なっていることが反映されていると考えられます。

さて、ムナグロは、国内では沖縄諸島・小笠原などで越冬しますが、西日本をどうやって通過しているか、詳しくわかっていません。小さい群れで通過して関東で集結するのか。それとも、関東以北の群れは、沖縄諸島で越冬する群れとは別の個体群なのでしょうか。シギ・チドリ類調査は、沿岸の干潟や湿地を中心に行われてきているので、調査されていない西日本の耕作地や草地で、大規模なムナグロの中継地が見つかる可能性もあります。

背中が黄褐色のムナグロは土の上でジッとしていると見つけるのは至難の業ですが、今度の秋期の渡りの時期は、内陸の水田や耕作地に注目してもらい、ムナグロの大きな群れを見つけたら、守屋 (moriya@bird-research.jp)まで報告していただければ幸いです。